

乗鞍高原における宿泊施設の空間変容

豊島健一・佐藤 淳・呉羽正昭

キーワード：乗鞍高原，旅館，ペンション，民宿，温泉，インターネット

I はじめに

日本の観光業は、第二次世界大戦後に大きく発展してきた。戦前では、温泉観光地がその中心的な役割を演じていたが、戦後は、海水浴やスキーなどの野外レクリエーションが増大した結果、非温泉地においても観光業は大きく発展してきた。とくに、それまで第一次産業を主体としてきた農山漁村においてその観光業の展開が顕著にみられた。こうした発展には経済の高度成長に伴う、収入の増加や余暇の増加が大きく影響している。

しかし、その後観光レクリエーションの多様化時代が到来し、従来の画一的な観光業の形態では、そうした需要に対応しきれなくなった。また、観光業が大きく発展した結果、供給過多の状況が危惧されるようになってきている。さらに、現在、1990年代初頭まで数年間続いた「バブル経済」以後の不況時代であるとされ、観光業の不振も叫ばれている。

これまで乗鞍高原に関する研究としては、乗鞍高原の番所地区における集落の発展過程を明らかにした上野¹⁾、乗鞍高原の集落と産業経済の発展過程を明らかにした市川・白坂²⁾の研究がある。このうち、後者においては観光業の発展を集落の変容の観点から明らかにしている。しかし、先述したように観光業を巡る状況は、その後大きく変容しており、乗鞍高原の観光業においても例外ではない。そこで本研究は、そうした状況下で乗鞍

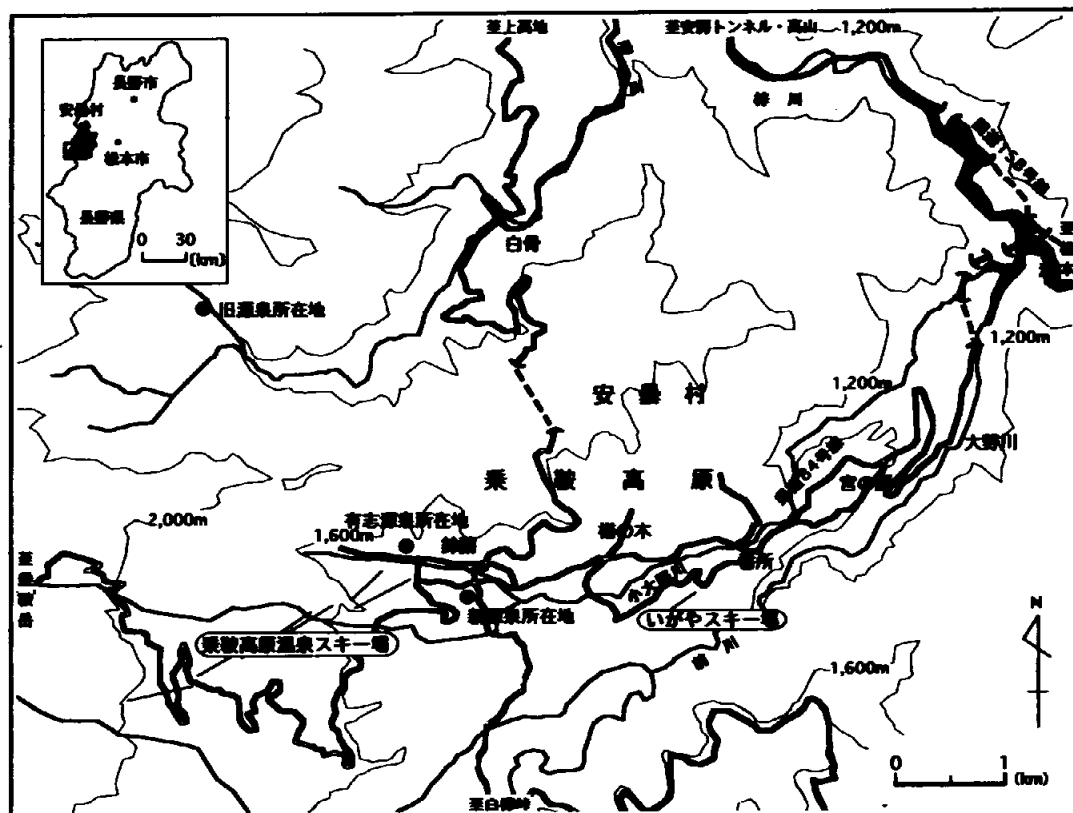
高原における観光業がいかなる状況にあるかを解明することを試みる。そのため、乗鞍高原の1969年から1999年における観光客の動向について分析を行い、乗鞍高原に位置する宿泊施設の立地数、業態、宿泊定員などの調査を行った。また乗鞍高原の宿泊施設がとりくむ経営・新戦略に関しても分析を行った。

II 研究対象地域の概要

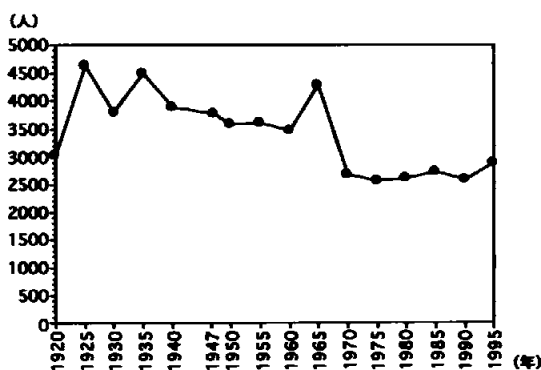
II-1 安曇村の概要

安曇村は長野県松本市の西方に位置し、岐阜県との県境を成す、面積400km²の村である(第1図)。村西部には槍ヶ岳・穂高岳・乗鞍岳などの北アルプスの山々が聳え立っている。大野田・鳥々・橋場・稲核等の各集落は、標高660~1,200mの梓川沿いの小規模な平坦地や緩斜面に立地する一方で、大野川・鈴蘭は、前川・小大野川上流の標高1,500mの高原地帯(乗鞍高原)に形成されている。乗鞍高原を除き、村の大部分は起伏の多い急峻な地形であり、住宅地や耕作地はわずかである。気候は、北アルプスの山々を背にしているため、内陸性の気候で寒暖の差が大きい。冬は標高の高い乗鞍高原・白骨・上高地では寒さが厳しく雪が多いが、標高の低い稲核より下の集落においては雪が少ない。夏は湿度が低く、夜も涼しく過ごしやすい気候である。

安曇村の常住人口は、1965年頃に奈川渡ダム建設工事の終了のために大きく減少した(第2図)。



第1図 研究対象地域



第2図 安曇村の人口の推移 (1920~1995年)
(国勢調査により作成)

それ以降は、乗鞍高原への定住者が増えたことによって常に微増傾向にあり、1995年の人口は2,893である(国勢調査)。

安曇村の産業構造は大きく変化してきた。国勢

調査によると、かつての主産業である農業・林業は大きく衰退し(1965年14.5%→1995年1.0%)、卸売・小売業、サービス業といった第3次産業の伸びが著しい(1965年30.0%→1995年65.1%)。これは従来行われてきた製炭業や養蚕業が衰退し、上高地・白骨温泉・沢渡・乗鞍高原などにおいて宿泊施設や飲食店・土産品店などの観光関連産業が増大したことを反映したものであろう。

Ⅰ-2 乗鞍高原の概要

安曇村は1874(明治7)年、大野田、嶋々、稲核、大野川の4村の合併により誕生し、本研究の対象地域である乗鞍高原は、旧大野川村域に含まれる。

乗鞍高原は元来「番所原」と呼ばれていたが、観光地としての開発が進められるにつれ、次第に現在の「乗鞍高原」という名称が使用されるよう

になってきた。もともとは乗鞍高原には集落が存在せず、江戸時代においては大野川のみが存在していた。大野川は松本藩の御用柳村であり、一帯に広がる藩有林を伐採する林業が主たる経済活動であった。しかし、一部の住民は番所原に若干の耕地を有し、作小屋に季節的に居住する出作農も見られた。そこではそば・あわ・ひえが栽培されており、また、自生しているわらびから「わらび粉」が製造された。

明治時代に入ると林業は衰退し、大野川の農民は作小屋を改築・増築し、かつての密集した集落から広大な乗鞍高原へと次第に移住するようになった。この時期に重要な現金収入源としての製炭・養蚕が盛んになり、大半の農家が従事するようになった。養蚕は広い蚕室が必要であり、そのために作小屋を拡大したことが季節的集落の定住化を促したという²⁾。このほか雑穀栽培に加えて、乗鞍高原に高原牧場を開設し乳牛を育成するなど、さまざまな形態の経済活動を組み合わせて山村経済が維持されていた。

Ⅰ-3 乗鞍高原の観光開発

元来は「霊山」として修験者たちの修行の場であった乗鞍岳が、近代登山の対象として認識されるに至ったのは明治時代に入ってからであった。さらに、昭和初期から乗鞍岳は、スキー場としても知られるようになった。その後、乗鞍岳へは多くの登山者・スキー客が訪れるようになり、それらの客を対象に山小屋・民宿が開かれた。しかしこれらの建物は作小屋を改造して提供されたものであり、農民の副業であるにすぎなかった。また、地元の住民は山岳スキーのガイドを務めるようになり、新しい収入源となった。

乗鞍高原の民宿数が増えるのは、1960年代後半になってからである(第1表)。1962年、番所地区を中心とする22軒の民宿からなる乗鞍高原民宿組合が結成された。またその翌年には、乗鞍高原夏季学生村が開設された。これは都市地域の高校生・大学生に、夏休みに涼しい乗鞍高原で勉強してもらおうと、宿泊施設を安価で提供するという

第1表 乗鞍高原における宿泊施設数の推移
(1960～2000年)

単位：軒

年	鈴蘭	槇の木	番所	宮の原	乗鞍高原合計
1960	4	0	0	0	4
1965	10	6	13	4	33
1970	21	8	24	6	59
1975	33	12	34	12	91
1986	46	19	48	14	127
2000	64	27	48	17	156

(市川・白坂(1978)、長野県商工部観光課(1987)により作成。2000年は現地調査による)

もので、民宿にとっては夏の現金収入源として期待された。これにより乗鞍高原の民宿の数は、1964年には28軒、1965年には31軒と、毎年のように増加した³⁾。この乗鞍高原夏季学生村の賑わいは、都市部にクーラーが普及し、涼しく夏が過ごせるようになる1970年代半ばまで続いた。

このように、番所地区を中心に民宿が増えていったのに対し、鈴蘭地区においては、1962年の乗鞍高原温泉スキー場開設以降、古くから存在した山小屋に加えて、旅館が建設されるようになった。この地区に存在する旅館を中心に、1970年に乗鞍高原温泉旅館組合が結成された。その後ペンションの建設も進んでいる。

また、1976年には湯川の源流部から乗鞍高原への引湯工事が行われた。湧出量毎分1,500リットル、泉質は「酸性硫化水素泉」であった(以下、この温泉を「旧源泉」と呼ぶ)。同年、温泉利用者により乗鞍温泉組合が設立された。しかし、この総湯量では乗鞍高原の宿泊施設全体をまかなうことができないため、鈴蘭地区を中心に106軒の宿泊施設⁴⁾にのみ分配された。

Ⅱ 乗鞍高原における観光客数の変化

Ⅱ-1 観光客数の変化

第3図は安曇村の3大観光地の観光客数を示したものである。乗鞍高原についてみると、1969年から1984年頃までは年間の観光客数は20万～30万人であった。しかしその後その数が急増し、1991年には88万人にまで増加した。この時期はいわゆる

るバブル経済の時期と重なり、好景気による金銭的な余裕や余暇時間の増大がこうした観光客数の激増もたらした。しかしながら、その後観光客数は減少する。1994年までは84万人と微減傾向であったが、その後5年間で57万人まで激減した。

こうした観光客数の推移を上高地および白骨温泉と比較してみよう。上高地や白骨温泉とも1985年前後から観光客数の増加がみられた。上高地の場合、1984年の観光客数が42万人であったものが、翌1985年には85万人へと倍増し、1995年には183万人まで増加した。1995年以降は微減傾向を示すものの、1999年においても164万人とその減少率は1割強にとどまっている。一方白骨温泉であるが、1969年～1983年までは年間観光客数が10万人以下であったが、その後増加を示し1998年までは20万人前後の観光客数で推移し、1999年には31万人へと増加した。このような観光客数の増減は、乗鞍高原とは対照的である。

このようにいずれの観光地も1985年前後から観光客数を急増させたが、バブル経済の崩壊以後は観光客数の減少に見舞われるようになった。日本でも名高い景勝地として知られる上高地や、山中の情緒ある温泉として知られる白骨温泉は観光客数の減少をくい止めたものの、乗鞍高原は独自の観光資源に乏しいため観光客数の大幅な減少に見舞われたと考えられる。また乗鞍高原は上高地な

どへの宿泊拠点としての意味合いも強いが、日帰り客が増加しているため、その影響も大きく受けている。

Ⅲ-2 月別観光客数の変化

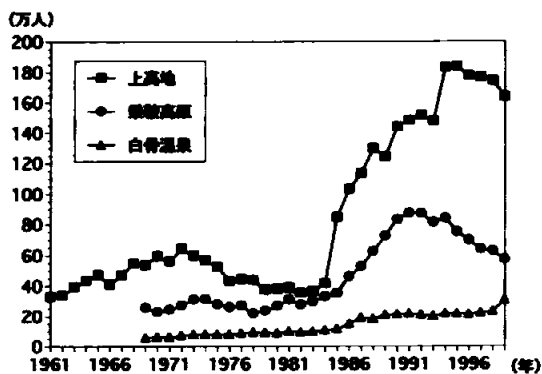
乗鞍高原における月別観光客数を1970、1991、1999年の3年次について示したものが第4図である。1969年から1987年までは8月に4割前後の観光客が集中していた。1988年以降は8月に乗鞍高原を訪れる観光客の割合が3割前後に下がっており、1991年および1999年には小さいながらも冬季にもピークを析出できる(第4図)。

このことから、1985年以降にみられた乗鞍高原における観光客の激増は、従来観光客が集中していた夏休み期間中の観光客が増加したのみではなく、スキー観光を中心とした冬季の観光客の誘引に成功した側面が大きいといえる。しかし、バブル経済の崩壊に伴って乗鞍高原の観光客数は減少に転じる。観光客数の減少は冬季の減少率が若干大きいものの、特定の時期や季節に偏っているわけではなく、通年的である。

Ⅳ 宿泊施設の現状

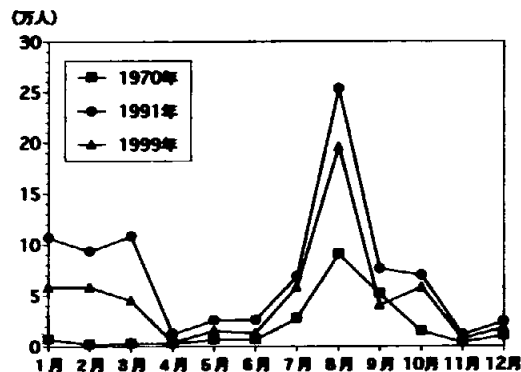
Ⅳ-1 宿泊施設の種類と定義

一般に宿泊施設の定義は難しい。本論において



第3図 安曇村の観光客数の推移 (1961～1999年)

(長野県商工部観光課 (1962～2000) により作成)



第4図 乗鞍高原における月別観光客数の推移 (1970, 1991, 1999年)

(長野県商工部観光課 (1971, 1992, 2000) により作成)

は宿泊施設を次のように分類した。まず、客室形態が洋室主体か和室主体かで分類し、そのうち洋室主体のものをペンションとした。一方、和室主体の宿泊施設はさらに2つに細分され、専業経営のものを旅館、兼業経営のものを民宿とした。

Ⅳ-2 宿泊施設の分布

乗鞍高原においては、宿泊施設に関する組合が2つあり、鈴蘭地区の宿泊施設で乗鞍高原温泉旅館組合が、檜の木、番所、宮ノ原の各地区で乗鞍高原民宿組合が組織されている。2000年5月時点で156軒の宿泊施設が存在する。第5図は形態別の宿泊施設の分布をあらわしたものであるが、地区による差異がみられる。鈴蘭では旅館が最も多く、民宿は数軒のみであるのに対して、番所では旅館やペンションもあるものの、民宿の立地も多くみられる。ただし檜の木地区は例外的であり、民宿組合に所属する地区でありながら、民宿の立地はみられず、ペンションが最も多い。

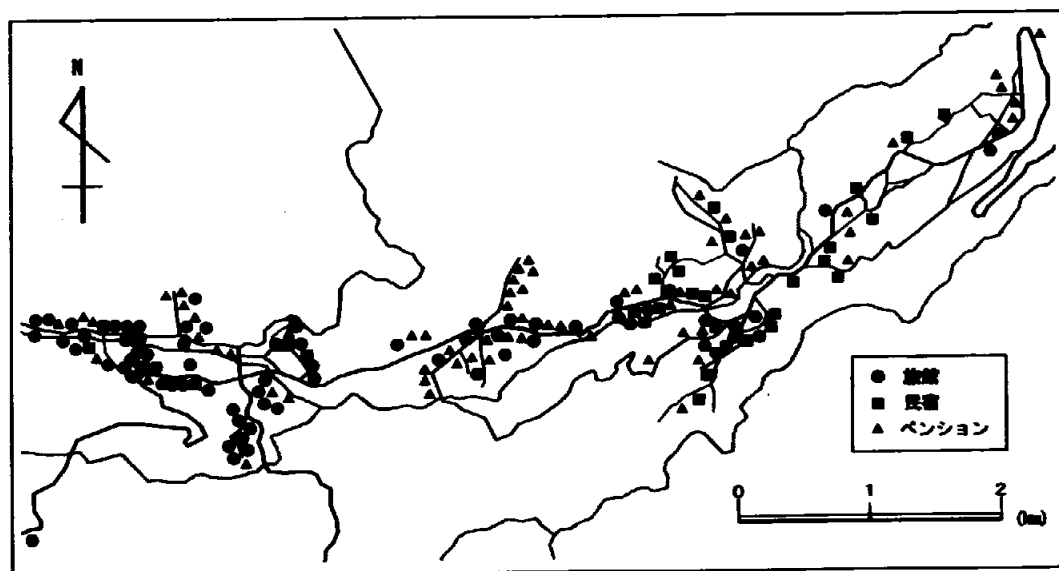
また宿泊施設の収容人員規模についても、地区による差異がみられる(第6図)。鈴蘭には51人以上の収容能力を持つ中規模以上の宿泊施設が多

くみられるのに対して、檜の木、番所、宮ノ原の宿泊施設は50人以下の収容能力しか持たない小規模のものが主体となっている。とくに宮ノ原に立地する宿泊施設の収容人員は、すべて30人以下の収容能力である。乗鞍高原においては、修学旅行者の受け入れを積極的にすすめているが、その主な受け入れ先は大規模施設が多い鈴蘭地区に集中している。こうした規模の地域差は地区による宿泊者の属性の差異に関連している。

Ⅳ-3 宿泊施設の経営形態

村外出身者の経営する宿泊施設は鈴蘭地区の北西部と檜の木の北東部に集中して立地する傾向が強くみられる。これは土地の開発や造成時期によるものと推測される。

第7図は宿泊施設の経営形態をあらわしたものであるが、ここでも地区による差異が明瞭にみられる。鈴蘭や檜の木においては専業の宿泊施設がほとんどであるのに対して、番所においては兼業の宿泊施設が多くみられる。なかでも檜の木に関しては、不明のものを除いて全て専業となっている。50人以上の収容人員を持つ宿泊施設において

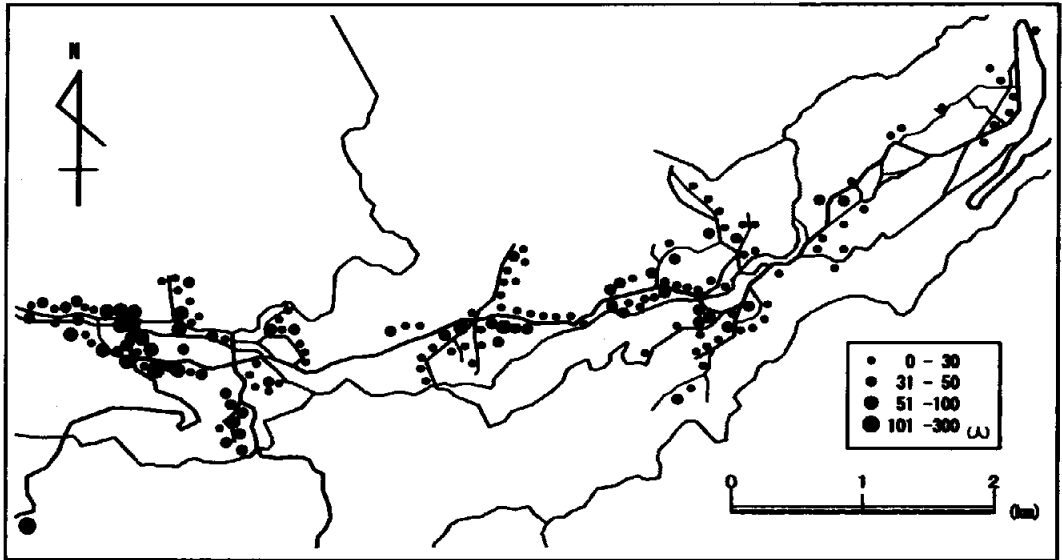


第5図 乗鞍高原における分類別みた宿泊施設の分布
(現地調査により作成)

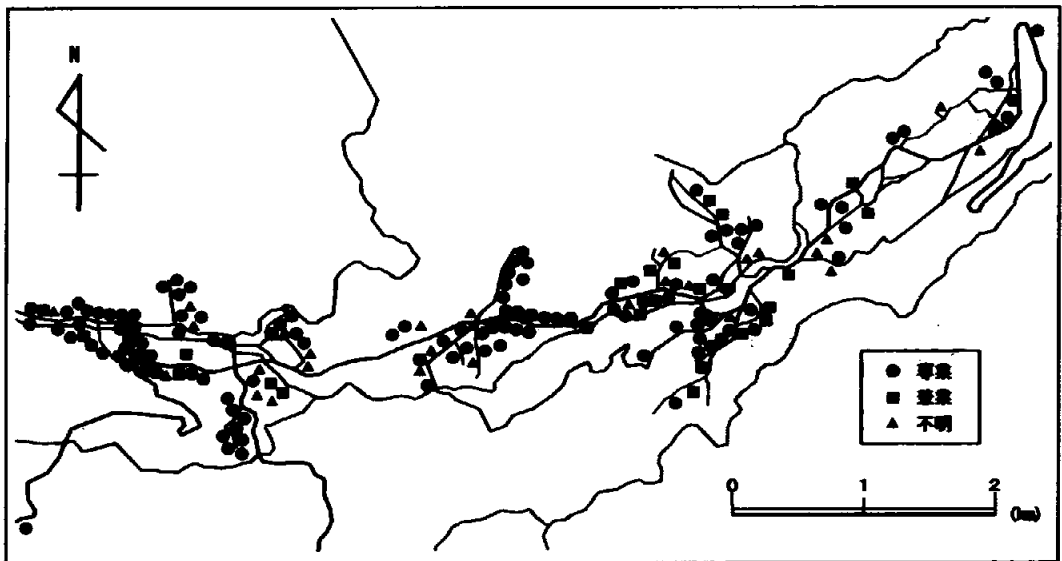
は1軒を除いて専業となっており、大規模宿泊施設に関しては専業形態がほとんどである。また村外出身者の経営する宿泊施設については、その規模に関わらず専業形態となっている。兼業については建設業に従事するものが最も多くなっている。

その他、喫茶店やレストランなどを宿泊施設に併設した形で経営しているところも見受けられる。

労働力に関しては家族経営をしているところが多く、繁忙期のみアルバイトを雇用するというところが多くなっている。



第6図 乗鞍高原における取容人員規模別にみた宿泊施設の分布
(現地調査により作成)



第7図 乗鞍高原における経営形態別にみた宿泊施設の分布
(現地調査により作成)

Ⅳ-4 観光客の居住地構成

乗鞍高原への観光客数をその居住する都道府県別に分析することは資料の制約上困難である。そこで本節では宿泊施設での聞きとり、およびペンションXの県別宿泊件数の資料を用いることにする。

聞きとり結果によると、3大都市圏から訪れる観光客が非常に多い。しかし、3大都市圏からはほぼ均一に宿泊客を集める宿泊施設や、首都圏もしくは中京圏からの宿泊客が大半を占める宿泊施設など、宿泊施設ごとに観光客の居住地構成には大きな差異がみられる。それは常連客の割合が比較的高く（後述）、彼らの口コミで紹介がなされる割合が多いためである。また絶対数は少ないものの、安房トンネルの開通以来、北陸方面からの観光客が訪れるケースが増加している。

次にペンションXの県別宿泊者数について分析を行う。ペンションXを利用した観光客の居住地構成のうち5%以上を占める都道府県をみると、愛知県16%、神奈川県13%、東京都13%、大阪府7%、静岡県7%、千葉県5%、埼玉県5%の7都府県であり、首都圏および中京圏からの観光客が多くなっているが、近畿地方も2府4県で20%を占めている（第2表）。

ペンションXにおいては季節による差異が大きくみられる。通年において3大都市圏からの観光客が多いものの、夏季においては絶対数は少ないが全国各地から観光客が訪れている。それに対し、冬季においてはほとんどすべてが3大都市圏からの観光客である。なかでも愛知県からの観光客の割合が1992年度以降増加しており、1998年度と2000年度の冬季を除き20%以上の高率で推移している。また静岡県においても、冬季の観光客の割合が12%前後で推移している。一方千葉県および埼玉県では夏季にはいずれも6%を超えるのに対し、冬季は1~2%となっている。

これは愛知県およびその周辺部の居住者がスキー観光を行う際には乗鞍高原をはじめとする長野県南西部または岐阜県を志向するのに対して、千葉県および埼玉県居住者がスキー観光を行うさ

第2表 ペンションXの都道府県別宿泊者数
(1988年夏~2000年冬までの累計)

地 域	冬季		夏季		TOTAL	
	人数	%	人数	%	人数	%
北海道・東北	2	0.11	18	0.48	20	0.63
北陸	8	0.46	205	5.43	213	3.86
北関東	4	0.23	147	3.89	151	2.73
千葉	48	2.75	241	6.38	289	5.23
埼玉	31	1.77	256	6.78	287	5.19
東京	232	13.27	461	12.21	693	12.54
神奈川	235	13.44	496	13.13	731	13.23
山梨	72	4.12	55	1.46	127	2.30
長野	82	4.69	73	1.93	155	2.81
静岡	203	11.61	201	5.32	404	7.31
岐阜	48	2.75	99	2.62	147	2.66
愛知	372	21.28	528	13.98	900	16.29
三重	83	4.75	115	3.04	198	3.58
奈良	44	2.52	72	1.91	116	2.10
和歌山	14	0.80	35	0.93	49	0.89
滋賀	37	2.12	96	2.54	133	2.41
京都	34	1.95	129	3.42	163	2.95
大阪	130	7.44	277	7.33	407	7.37
兵庫	46	2.63	176	4.66	222	4.02
中国・四国	9	0.51	70	1.85	79	1.43
九州・沖縄	2	0.11	18	0.48	20	0.36
国外	3	0.17	1	0.03	4	0.07
不明	9	0.51	8	0.21	17	0.31
合計	1748		3777		5525	

(ペンションXの資料により作成)

いには長野県南東部や東北地方、新潟県などを志向するためである。

Ⅳ-5 観光客の属性

ペンションXにおける観光客の同行形態は、家族63%、グループ21%、カップル14%の順であり、単独利用はほとんどみられない（第3表）。観光客の属性についても季節による差異がみられる。家族は夏季が69%を占めるのに対し、冬季は51%となる一方、グループについては夏季が14%であるのに対し、冬季は34%となっている。また、夏季については雑誌をみて宿泊した観光客が67%を占めるのに対し、冬季は33%とその割合は半減する。代わって冬季には以前に宿泊したからという観光客が46%を占めており、リピーターの割合が多いことがうかがえる（第4表）。

第3表 ペンションXの宿泊者属性別宿泊者数の推移 (1988年夏~2000年冬)

年	季節	1人		カップル		グループ		ファミリー		貸切		TOTAL 人数
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
1988	夏	3	1.47	39	19.12	32	15.69	130	63.73	0	0.00	204
	冬	3	2.94	12	11.76	62	60.78	25	24.51	0	0.00	102
1989	夏	7	2.81	36	14.46	48	19.28	158	63.45	0	0.00	249
	冬	6	4.23	23	16.20	70	49.30	43	30.28	0	0.00	142
1990	夏	8	2.97	28	10.41	35	13.01	198	73.61	0	0.00	269
	冬	4	2.12	36	19.05	77	40.74	71	37.57	1	0.53	189
1991	夏	3	0.95	43	13.65	52	16.51	217	68.89	0	0.00	315
	冬	1	0.57	23	13.07	68	38.64	81	46.02	3	1.70	176
1992	夏	4	1.25	48	14.95	53	16.51	215	66.98	1	0.31	321
	冬	2	0.96	39	18.66	71	33.97	95	45.45	2	0.96	209
1993	夏	4	1.21	47	14.20	55	16.62	224	67.67	1	0.30	331
	冬	2	1.16	22	12.72	50	28.90	98	56.65	1	0.58	173
1994	夏	3	0.92	46	14.07	42	12.84	236	72.17	0	0.00	327
	冬	1	0.65	22	14.29	43	27.92	88	57.14	0	0.00	154
1995	夏	11	3.11	50	14.12	29	8.19	264	74.58	0	0.00	354
	冬	1	0.71	12	8.57	40	28.57	86	61.43	1	0.71	140
1996	夏	5	1.45	45	13.04	42	12.17	252	73.04	1	0.29	345
	冬	0	0.00	17	15.45	28	25.45	63	57.27	2	1.82	110
1997	夏	8	2.73	36	12.29	35	11.95	212	72.35	2	0.68	293
	冬	1	0.79	12	9.45	31	24.41	82	64.57	1	0.79	127
1998	夏	14	3.24	57	13.19	66	15.28	289	66.90	6	1.39	432
	冬	0	0.00	8	7.08	24	21.24	81	71.68	0	0.00	113
1999	夏	10	2.97	45	13.35	47	13.95	229	67.95	6	1.78	337
	冬	2	1.80	7	6.31	33	29.73	69	62.16	0	0.00	111
夏TOTAL		80	2.12	520	13.77	536	14.19	2624	69.47	17	0.45	3777
冬TOTAL		23	1.32	233	13.34	597	34.19	882	50.52	11	0.63	1746
TOTAL		103	1.86	753	13.63	1133	20.51	3506	63.48	28	0.51	5523

(ペンションXの資料により作成)

Ⅳ-6 温泉

温泉を引いている宿泊施設の分布をみると(第8図),すべての地区において分散している。旧源泉を引いている宿泊施設をみると、鈴蘭地区に最も多く、その他の地区では主に県道84号線沿いのみみられる。これはこの源泉は湯量が少ないために、古くからの宿泊施設への引湯に制限され、また、新規の宿泊施設の加入を認めていないからである。鈴蘭地区ではほとんどの宿泊施設で温泉を引いているが、それ以外の地区においては温泉を引いていない宿泊施設が多くみられる。これは温泉の源泉が鈴蘭地区に存在するため、鈴蘭地区の宿泊施設から温泉が優先的に供給されていったためである⁶⁾。

V 新しい経営戦略

先述のように、乗鞍高原では観光客数が減少す

るといった問題が存在する。そうした状況に対して、観光客獲得への新たな動きがみられるようになってきた。

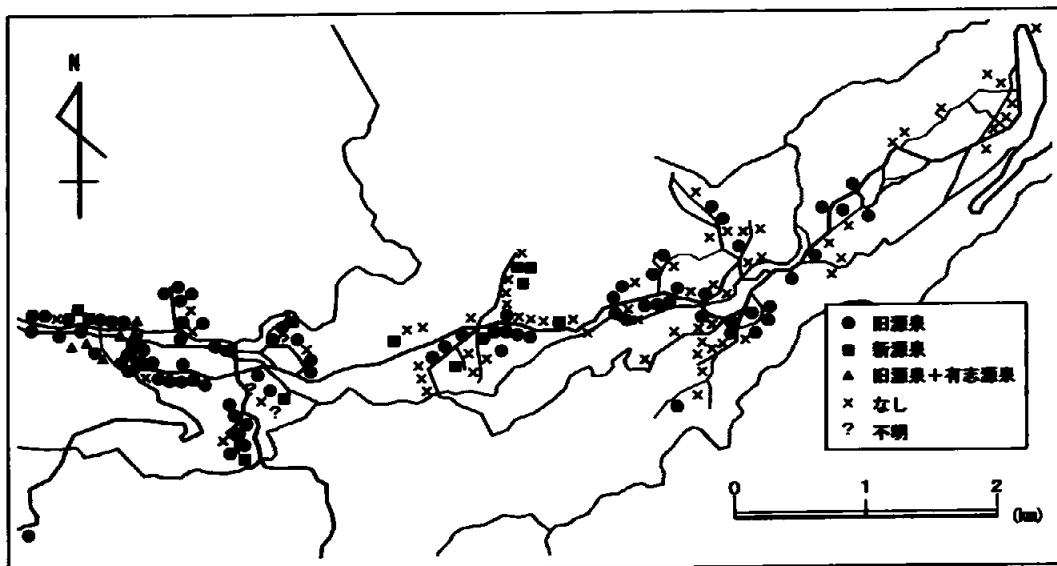
V-1 新温泉

そのひとつとして、新しい源泉を発掘するという動きがある。1976年より引湯が始められた従来の源泉は、先述のように湯量が乏しく、すべての宿泊施設には供給されていない。そのため、温泉の供給がされていない宿泊施設からは、新しい温泉を望む声があがっていた。実際、1992年には温泉の供給がされていない宿泊施設の経営者を中心に、乗鞍高原全体で156人の署名が新源泉に関する要望書と共に村に手渡された。これを受けて安曇村役場は1996年より温泉のボーリングを開始し、新しい源泉を発見した(以下、新源泉)。新源泉は湧出量毎分150リットルで、湯量が乏しい

第4表 ベンションXの宿泊動機別宿泊者数の推移 (1988年夏～2000年冬)

年	季節	雑誌		エージェント		知人の紹介		以前に宿泊		TOTAL 人数
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
1988	夏	155	75.98	3	1.47	34	16.67	12	5.88	204
1989	冬	34	33.33	6	5.88	36	35.29	26	25.49	102
	夏	159	63.86	10	4.02	57	22.89	23	9.24	249
1990	冬	64	45.07	8	5.63	33	23.24	37	26.06	142
	夏	192	71.38	7	2.60	40	14.87	30	11.15	269
1991	冬	88	46.56	19	10.05	28	14.81	54	28.57	189
	夏	183	58.10	47	14.92	27	8.57	58	18.41	315
1992	冬	58	32.95	23	13.07	21	11.93	74	42.05	176
	夏	199	61.99	21	6.54	42	13.08	59	18.38	321
1993	冬	67	32.06	11	5.26	25	11.96	106	50.72	209
	夏	244	73.72	12	3.63	18	5.44	57	17.22	331
1994	冬	45	26.01	15	8.67	22	12.72	91	52.60	173
	夏	219	66.97	13	3.98	22	6.73	73	22.32	327
1995	冬	53	34.42	17	11.04	15	9.74	69	44.81	154
	夏	239	67.51	12	3.39	40	11.30	63	17.80	354
1996	冬	41	29.29	3	2.14	18	12.86	78	55.71	140
	夏	237	68.70	7	2.03	33	9.57	68	19.71	345
1997	冬	29	26.36	2	1.82	19	17.27	60	54.55	110
	夏	182	62.12	8	2.73	35	11.95	68	23.21	293
1998	冬	38	29.92	1	0.79	15	11.81	73	57.48	127
	夏	304	70.37	6	1.39	33	7.64	89	20.60	432
1999	冬	25	22.12	0	0.00	16	14.16	72	63.72	113
	夏	216	64.09	6	1.78	34	10.09	81	24.04	337
2000		37	33.33	2	1.80	15	13.51	57	51.35	111
夏TOTAL		2529	66.96	152	4.02	415	10.99	681	18.03	3777
冬TOTAL		579	33.16	107	6.13	263	15.06	797	45.65	1746
TOTAL		3108	56.27	259	4.69	678	12.28	1478	26.76	5523

(ベンションXの資料により作成)



第8図 乗鞍高原における源泉別にみた宿泊施設の分布
(現地調査により作成)

ため、新源泉の湯は鈴蘭・楯の木地区の17の宿泊施設にのみ配湯されることとなった⁷⁾。温泉の採掘は村の経費であったが、それぞれの宿泊施設までの引湯施設は各自の負担となった。聞き取りによれば、各自の引湯設備建設の費用は数百万円かかるが、「そこまでしても引く価値がある」という声が多数を占めていた。ペンションAの話では、電話での予約注文の際に、「温泉がない」と言うと半分程度の客が断るといふ。温泉が有する集客力の大きさを反映しているといえよう⁸⁾。

V-2 インターネット

第2の新しい経営戦略として、インターネット社会への対応という動きがあげられる。宿泊施設の中には独自のホームページを持ち、情報を多くの人に発信しているところもみられる。2000年10月現在、102軒の宿泊施設がホームページを持っている。これらの宿泊施設のホームページには、施設の紹介や宿泊料金の掲示といった基本的な情報だけでなく、空室情報や宿泊予約の受け付けまで行なっているものもある。これはインターネットが広く普及したことに対応した動きであるといえよう。聞き取り調査においては、インターネットを利用することのメリットとして、「多くの人に情報を発信することができる」、「電子メールによりダイレクトメールのコストがゼロで出しやすい」、「客とのコミュニケーションが容易にできるために、リピーターになる確率が高い」ということがあげられた。

ペンションBの話では、2000年現在、全宿泊客の9割が電子メールによる宿泊予約であり、その多くは首都圏・関西地区の中年男性だといふ。また民宿Cの話では、インターネットを始めて以来、予約が増えたといふ。電話予約をする客もほとんどがホームページを見ており、ホームページによるPRは、ある程度の効果をあげていると考えることができるが、ホームページを開設している宿泊施設の中には、その効果を疑問視しているところもあり、慎重に見極める必要があるといえよう。

このほか、いくつかの宿泊施設が参加して、「安曇村サイバーネットワーク」というLANシステムが実施されている。これは、地域住民と協賛企業、村が三位一体となって構築された無線LAN地域インターネットシステムであり、乗鞍高原にあるネットワークセンターから無線で各公共施設や宿泊施設等を結び、各宿泊施設の客室において24時間の常時インターネット接続を可能とした。また、システムの構築から運用まで村ですべて行なっており、「平成11年度優良情報化団体（自治大臣表彰）」に選出されている。

インターネットを利用して集客活動を行なっている宿泊施設の分布をみると、乗鞍高原全体に広がっている。しかし、宿泊施設独自のホームページをもっている割合としては（第5表）、楯の木地区が最も多く、その他は鈴蘭・番所・宮の原地区の順である。そして宿泊施設の経営形態との関係を見ると、どの地区においてもペンションによる利用が顕著である。これはペンションの経営者の年齢が比較的若く、新しいメディアにも即座に対応して積極的な集客活動をしているためであると思われる。楯の木地区の宿泊施設においてホームページ所有率の高いのは、ペンションが多くみられるためだと考えられる。一方、兼業であり、比較的年齢の高い経営者の多い民宿においては、インターネットを利用しての集客活動は活発ではない。したがって、民宿の多い番所・宮の原地区のホームページ所有率はそれほど高くない。また、LANの利用に関しても最も積極的なのは楯の木・鈴蘭・番所地区のペンションであった。すなわちペンション経営者は、インターネットを利用しての集客活動に積極的に取り組んでいることがわかる。

V-3 積極的な集客活動

このように乗鞍高原では、観光客数が減少するといった問題に対する新たな動きがみられる。それは新しい温泉を引くことであり、インターネットによるPR・予約サービスである。これらの動きがみられたのはここ数年のことであり、極めて新

第5表 乗鞍高原の宿泊施設におけるインターネット活用状況

単位：軒

集落	経営形態	HPあり	(うち LAN 参加)	HPなし	計
宮の原	ペンション	7	(0)	2	9
	民宿	1	(0)	5	6
	旅館	1	(1)	1	2
	計	9	(1)	8	17
番所	ペンション	15	(5)	4	19
	民宿	4	(1)	9	13
	旅館	7	(1)	6	13
	計	26	(7)	19	45
槇の木	ペンション	16	(7)	2	18
	旅館	5	(2)	4	9
	計	21	(9)	6	27
鈴蘭	ペンション	11	(5)	5	16
	民宿	4	(0)	0	4
	旅館	30	(0)	14	44
	計	45	(5)	19	64
乗鞍高原	合計	101	(22)	52	153

※ HP については2000年10月時点の調査による。

(聞き取り調査および関連 HP により作成)

しい動きであるといえよう。

このような積極的な集客活動を行なっている宿泊施設は、鈴蘭・槇の木地区に多く、宮の原・番所地区ではそれほど多くはない。その理由としては、各地区の位置と宿泊施設の経営形態の2つが考えられる。インターネットによる集客活動には立地条件は全く重要でないが、新温泉に関しては非常に重要である。源泉が鈴蘭地区に存在するため、源泉のある鈴蘭地区とその隣りの槇の木地区では積極的に利用することが可能であるが、源泉から離れた宮の原・番所地区においては活用することが困難であるためである。ここに各宿泊施設の立地地点による差異が生じているといえよう。

また、宿泊施設の経営形態としては、ペンションにおいては積極的な集客活動がみられるが、民宿においては集客活動が活発ではない施設が多くみられた。ペンションの経営者は比較的若い人が多く、インターネットなどの新しい集客活動方法を受け入れることが容易であることと、他に収入源がないため専業に積極的にならざるを得ないという状況も反映していると思われる。逆に民宿に

おいては、経営者の年齢層が比較的高いため、新しいメディアを積極的に取り入れることが困難である。また、建設業のような他の収入源があるためにそれほど観光客数の減少を深刻にとらえていないことも、集客活動への取り組みを鈍らせる原因になっていると考えられる。このような宿泊施設の経営形態による差異が、乗鞍高原全体の傾向にも反映されている。ペンションの割合の大きい槇の木地区では必然的に積極的な集客活動がみられ、一方、民宿の割合の大きい宮の原・番所地区においては集客活動がそれほど盛んではない。

Ⅵ 終わりに

本研究では、長野県安曇村の乗鞍高原を対象に、観光業の変遷と宿泊施設の形態について分析・考察した。その結果、以下のような知見が得られた。

①乗鞍高原の宿泊施設は、鈴蘭地区においては規模の大きい旅館と比較的中規模のペンションが存在し、槇の木地区では主にペンションが、番所・宮の原地区においては小規模の民宿が多く見

られる。全体的に、地元出身の経営者が多く、村外からの移住者はペンションを経営している。温泉を所有している宿泊施設は鈴蘭・檜の木地区には集中している。

②乗鞍高原の観光業は、全国的な観光業の不振の影響を受けており、各宿泊施設は観光客を招聘するためにさまざまな対策を行なっている。そのひとつが温泉を引くことであり、あるいはホームページなどのインターネットを活用することである。このような対策を積極的に行なっている宿泊施設の経営形態としてはペンションが多く、宿泊客数の減少に歯止めがかかっており、その効果が

現れているといえる。

全国的な観光業の不振は日本全国すべての観光地にも少なからずみられ、乗鞍高原においても決して例外ではない。その観光業の不振を打開すべく、各観光地はさまざまな取り組みを行なっているが、そのような取り組みにこそそれぞれの観光地の特色が現れてくると考えられる。乗鞍高原においては、ペンションを中心としたインターネット及びLANを取り入れた集客活動であり、こういった不振対策の取り組みにおける地域差を解明することが、これからの観光地理学の大きな課題のひとつであるといっても過言ではないだろう。

本稿作成にあたって、安曇村役場、乗鞍高原旅館組合、乗鞍高原民宿組合、そして乗鞍高原の各宿泊施設の皆さんには大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

[注]

- 1) 上野福男 (1939) : 番所に於ける聚落と耕地—出作聚落, 其の定著及び定著と耕作の高距の問題を中心に. 地理学評論, 15(12), 15-40.
- 2) 市川健夫・白坂 審 (1978) : 乗鞍火山東麓における山地集落の変貌. 新地理, 26(1), 1-27.
- 3) 市川健夫・白坂 審 (1978) : 前掲2)
- 4) 安曇村誌編纂委員会 (1998) : 『安曇村誌 第三巻 歴史 下』安曇村, 679ページ.
- 5) 公営施設, 企業の研修所, 別荘等を含む.
- 6) 「旧源泉」以外の源泉については後述する.
- 7) 湯量が乏しいため, 鈴蘭・檜の木以外の地区には, 沢渡温泉から引湯する計画がある.
- 8) このほか, 鈴蘭地区の6人の有志によって発掘された源泉(第1図中「有志源泉」)も存在する.